

2003年11月17日 日本テレビ 定例会長社長記者会見

(要旨)

1. 視聴率操作問題について

記者：視聴率操作問題について、調査が続いていると思いますが、現状はいかがですか。

萩原敏雄 COO 社長

時期的に丁度皆さん、関心が非常に高いと思われますけれども、誠に申し訳ありませんが、今、調査委員会の調査がまさに大詰めを迎えてると思われます。

おそらく一両日中には報告書がまとまって、多分今までの慣例からすると、第三者機関的な調査委員会が調査結果をまとめた場合には、その調査委員会の方で発表になると思います。

私共は最初に申し上げました通り、調査委員会の調査に関して、関与したり、干渉したりしないことを建前にしてあります。調査委員会から現在こういう調査になっている等の説明も受けておりませんし、逆に私共からも最初の建前上どうなっていますかと聞くこともしてあります。

調査委員会の報告書がまとまりましたら、私共も誠実に対応するつもりですので、今日はご容赦いただきたいと最初に申し上げておきます。

記者：問題が発覚してから、調査とは別の問題として、社内に対して色々な対応がされたと思いますが、どのようなことをされましたか。

萩原社長：まず一番は、この問題に関しての社内への徹底が一番大事だと思いましたので、麹町で編成局の全員を集めましての編成会議で、事態の説明と、現在対応できる状況説明をしました。そのほかもちろん幹部会等でも、この問題に対する対応については、氏家会長、私のほうからも再三にわたり言ってあります。

細かいことで言えば、既に報道されていますが、この時期なので、金曜ロードショー「15ミニッツ」の映画の放送を当面見送るなどの配慮はしました。

あまり派手な形での視聴率に関する、例えば三冠王は取れた週でも比較的地味に社内的にはやってきたつもりです。

記者：前回の定例会見で、新しい番組評価を考える会とありましたが、進捗状況はいかがでしょうか。

萩原社長：これは調査委員会の報告が出た段階で、その後の我々の考えております対策の1つとして発表させていただくことになると思います。人選に関し

てはかなり進んでおりますが、ただ名前に関しては、まだ先生方にいつ公表するかとお伝えしておりませんので、今具体的に名前は申し上げられません。

考え方はこの間申し上げた視聴率に向き合ってずっと仕事をしてきた、どちらかといえば現場の方々、テレビ業界でなくとも映画、出版、そういうしたものにも関わっている方々にお願いをして、視聴率の使い方というのでしょうか、現状での視聴率をどう使ったら良いか、あるいはもうちょっと突っ込めば、視聴率以外の新しい番組評価の基準作りのようなものが、現場の経験から照らして考えていただけないかとの趣旨で、委員の方にもお願いをしてあります。

現行では委員長などのあまり堅苦しい形ではなく、フリートーキング的な形で自由に発言していただかうが良いということで、今のところ委員長は考えておりません。これも皆さん方お集まりいただき、相談してからということになろうかと思います。

記者：会 자체は全く外部の方だけですか。

萩原社長：そうです。私や編成局長は出席させていただきますが、あくまで皆さんのご意見を伺うということです。あとは幹事役に編成企画部長などがありますが、委員としては完全に外部の方です。私も編成局長も委員としては加わりません。

2. 地上デジタル放送開始直前、放送体制について

記者：12月1日に始まる地上デジタルの放送体制等について教えてください。

萩原社長：既にお知らせしましたが、11月23日に麹町のマスターを汐留のマスターに切り替えて放送発信をすると予定でしたが、延期しました。従いまして、12月1日の地上デジタル放送は、汐留のマスターから発信できなくなりました。汐留の放送設備、スタジオも全てデジタル化されておりますが、延期になりましたので、12月1日段階でのデジタル放送は、基本的にはアナログ放送のアップコンバートによるH D放送になります。一部H D制作番組についてはH Dで放送ができます。当初は50%以上のいわゆる新生H D放送を考えていましたが、残念ながらそうはならなくなりました。

その他、デジタル字幕やデータ放送も番組と非連動のもの、例えばニュース・天気などに関しては実施します。こういう状況ですので、12月1日にデジタル化する系列局、読売テレビ、中京テレビ、に関しても、部分的にはアップコンバートとなると思います。

マスター切り替え延期の理由は、システムのソフトに不具合が見つかったためです。切り替えてスタートする場合、全てについて100%、つまり絶対に事故

はないことが理想的な形ですが、少なくとも免許事業であり、なおかつ社会的に放送の使命を負っている以上、放送事故に関して最も気を遣わなければいけないという状況の中で、マスターの切り替えによる事故の確率が少しでもあるということであれば、多少のリスクを覚悟して汐留のマスターに切り替えろというのではなく、非常に危険であると考えました。

新社屋に移転し、12月1日に本当の意味でのデジタル放送ができる準備をしてきたので、そうしたかったのは山々でありますけれども、放送の責任ということを考えると、万全を期してスタートしたいということでございます。

切り替えの時期は、現時点では、少なくとも、プロ野球の開幕に間に合うべく作業を進めているという状況です。

記者：システムに不具合があったということですが、これはメーカー側の問題ということなのですか。

萩原社長：すべてメーカー側の責任とは思っておりません。私どもにも管理責任があるわけですから。設備そのものは、仮にある程度完備したとしても、新しいマスターに慣れるためのトレーニングも、相当長い期間繰り返しませんと万全を期せませんので、トレーニング期間を考えると、とても無理だと判断し、延期を決定しました。

3. 総選挙報道の総括

記者：先日総選挙の報道に関連して、特に出口調査をもとにした予測と結果には大きな隔たりがありました、それを含めた総選挙報道の総括を。

萩原社長：出口調査に関しては、報道局長から説明いたします。今回の総選挙特番は、レギュラー番組「真相報道 バンキシャ！」をベースにしたレギュラー番組の拡大で放送しました。好評の「バンキシャ！」の手法を生かした形での選挙番組ということで、他局との関係でもかなり頑張ったとは考えております。ただ、出口調査で大きな差が出たということは、出口調査のあり方というか、意味があるのかどうかも含めて、総括しなければいけないとは思っております。具体的には報道局長からいたします。

松本正樹報道局長：出口調査の結果については、残念ですが、過去に無い大きな誤差が生じました。大いに反省しております。今回の出口調査は、共同通信

社とＮＮＮの独自調査、この2つのデータを一括して予測するという設計をしました。このうち共同通信社のデータ量のコンピュータ処理が結局追いつかず、日本テレビに予定の7割程度のデータ量しか集まりませんでした。共同通信でも今調査をされていると伺っておりますが、この共同通信のデータを日本テレビのサーバーに取り込み、ＮＮＮのデータと一括して予測計算をしたとなっています。結果として選挙区、市町村ごとのデータに隔たりが出たために、予測は適正には行われなかつたと。言い訳のようですが、結局こういうことのようです。内容について日本テレビでも今精査していますが、詳細な分析に加えて、次の選挙、来年の6月の末か7月参議院選挙がすぐ目の前に来ているということですので、さらに精度を高めるよう努力して、その選挙に臨みたいと思っています。

記者：かなり組織だって今回の件については検討していると。

松本報道局長：不在者投票が700万人だと言われ、その調査をこれから取り組んでいかなければいけないことも含めまして検討しております。

4. 中間決算について

記者：それでは中間決算の見込みについて。

細川専務：11月20日が正式な決算役員会並びに発表ということになります。今回いわゆる修正発表に出ております数字は既にご案内と思いますが、8月18日に第1四半期の決算を行い、そこで業績の半期並びに通期の予想を出したわけです。それに対する修正という形です。

売上高は、単体ベースで、19億円の上方修正、それから経常利益は46億円の上方修正、当期純利益は24億の上方修正という形になりました。それ連結ベースの修正も同時にしました。基本的に今回は予想に対して売上げはそんなに大きく動いていないのですが、利益のベースで3割を超えたので発表しました。

売上げに関してはわずかですが、これは第2四半期のスポット売上げが予想ほどは沈まなかった。前年比ではかなり落ち込んでいるのですが、予想ほどには沈まなかったということ。それからいわば汐留の新社屋に移ると、それに関わるいろんなランニングコスト、初めての経験だったので、予算ベースでやや高めに設定していた気がします。ここでかなり大幅に実績が出た段階でコスト減が起きました。併せて制作費に関する期の初めからかなり厳しい予想を立てており、かなりコストコントロールがきつく効いたということ。そういう形で、むしろ売上げが大幅に伸びたというよりも、費用が内側に収まったという

恰好で、業績の修正をすることになったわけです。上半期の決算に関しては大要そういうことで、詳細に関しましては20日に正式に発表させていただきます。

5. 最近の視聴率動向分析

記者：それでは最近の視聴率動向について。

萩原社長：10月改編の成果というのも大体見えてきたが、やはり新番組というの非常に当たりにくい時代になりました。

そういう中で私たちの新番組では、金曜日の8時の「謎を解け！まさかのミステリー」が、スペシャル版20%でスタートして、先週の金曜日ワールドカップ、女子バレーの裏で16%取ってあります。この番組は通常であればまず20%は取れるだろうと。ドラマは月曜と水曜は相当きついなという感じで、土曜日が健闘している。フジテレビで「白い巨塔」が当たったということは、こういう本格的なドラマが当たるということで、ドラマ不振で手探り状態の我々にとっては非常に参考になる気がしています。

それからバラエティーの新番組は、フジテレビさんの「トリビアの泉」、私たちの「まさかのミステリー！」のようなこともあります、一般的にはやはり非常に苦しい新番組のスタートです。

そういう中で、フジテレビさんのワールドカップバレーがここまで盛り上がるということは、ちょっと予想外でした。

それからオリンピックの野球の予選3連戦ですが、これがこれまた大変高い数字。さらにもう1つ、巨人の出でない阪神・ダイエーの日本シリーズが、これも非常に高い数字を取った。昨日は高橋尚子さんが走ったのが27%も取ったことで、この秋はスポーツ物が注目を集め、高い数字を取って盛り上がっているという印象が強いです。従って、レギュラー番組が苦戦状態にあるというのも、反省して言えば、スポーツのイベントの話題性、あるいは感動、あるいはエキサイティング、スリリングといったような、言うならばエンターテイメントの極限的なものをはらんでいる生の迫力に、いささか作り物がついて行けないのかなという反省もあります。やっぱり通常の番組でもそういうのを目指していくかなければいけないのかなという感じを持っています。

記者：四冠王V10ということが確実になってきたと思いますが、そのご感想を。

萩原社長：今ごろですと大体例年は間違いないと言っています。絶対は絶対だと思います、計算上はね。だけど相当追い込まれるなという印象は持っています。ですからちょっと今の段階であまりV10の感想というのを言うのは、ちょっと時期も時期でございますので。

むしろ逆にいかにスポーツイベントとはいえ、ワールドカップ等々でこれだけ追い込まれるということは、やっぱり来年以降十分考えなければいけないこ

とということで、むしろ勝った負けたというより、ここまで追い込まれるということの危機感のほうが強いです。今年取れるとか取れないとかそういう問題ではなくて、つまり来年以降に対する危機感というのは、正直なところあります。

記者：V10続けたというのはひとつの節目かと思いますが。

萩原社長：でもやっぱりV12なのですよ、とりあえずの最大の目標は。

6. 年末年始編成について

記者：それでは年末年始の編成について説明お願いします。

萩原社長：比較的手堅い編成かなという気がします。もちろん正月に関しましては箱根駅伝があります。プライムタイムに関しても、比較的手堅い恒例ものを中心に並べたということです。もちろんロッキードの再現版とかいくつかの目玉があることは事実です。私からあえて申し上げるとすれば、大晦日の猪木さんの格闘技を今年はできることになったということです。私共が猪木さんと話を進めまして、実現するということになったわけです。そうしたら突然TBでK-1だ、フジテレビでプライドだということですが、何といったって格闘技は猪木さんがある意味で言えばブランドですし、そういう意味で中心的な存在ですから、私どもの猪木祭がそういう意味で言うと仮に3本並ぶことになっても、やはりブランドであると十分自信は持っています。

7. 年末年始のイベントについて

記者：年末年始のイベント等もいろいろ検討されているのですか。

萩原社長：お手元に資料を配りました。新社屋になり、夏休みも汐留地区いろいろなイベントを展開しました。

今回はクリスマスとお正月を中心に、新社屋の周辺でかなり華やかなイベントを予定しています。例えば9メートルのキャンドルツリーを大屋根下あたりに設定しまして、そこでイベントや、名前は公表できませんがイベントをやりたたり、ドラマのロケをというようなことも考えている。

それから8月にもやりました例の大きいバルーンをやります。これは実は卵の上にあれが乗っているつもりだったのですが、石原知事によると「何だか、てんとう虫だ」と言われました。あれを今回また再現をいたしまして、クリスマスというのと、クリスマスの後はお正月のを社屋にドーンとぶら下げます。

タワー全体を華やかにカラーライトアップするようなことも考えてあります。それからお正月になりますと、江戸正月の典型的なものをいろんなイベントで紹介したり、それから夏休みもやりましたが、大道芸の芸人たちに来ていただいて、今度はコンテスト風の試みも考えてあります。

汐留周辺をクリスマスからお正月にかけて、イベント広場風に華やかに展開して、たくさんの方に来ていただこうという計画で、当然イベントだけではなくて、番組と連動して、ドラマのロケにキャンドルツリーを使ったりいたしますが、いろんな形で番組とも連動していきます。

8. 来期の巨人戦中継の放送予定と視聴率の見通し

記者：来期の巨人戦中継の予定と視聴率の見通しについていかがですか。

萩原社長：巨人戦中継の予定は、まだ正式にカードが決まっていません。本数で言えば、ほぼ今年と同じと考えていただきたいと思います。読売新聞でＮＨＫとの交渉などもあると思いますが、1、2本の差はあると思いますが、試合数はあまり変わらないだろうと思います。

視聴率に関しては、先ほども申し上げました通り、例えば巨人が出場しない日本シリーズでも、あれだけいい試合をすれば良い視聴率が出ます。オリンピック予選でも、話題性と試合展開によってはあれだけの数字が出るので、常日頃申し上げている通り、とにかく試合が面白いことが一番だと思います。

ですから堀内巨人が、良い試合をしてくれれば、十分視聴率も期待ができると考えています。もちろん勝ってもらいたいのは山々ですが、良い試合をしてほしいというのが、われわれ放送する立場の願いです。

記者：延長枠についての考えはありますか？

萩原社長：まだちょっと確定しておりません。

9. その他

記者：デジタルの放送が麹町からになるということで、1か月ぐらいかと思っていたが、3月ぐらいを目指しているということですが、その間、何かされるのではないかなと思いますがいかがですか？

萩原社長：これから汐留マスターに切り替えるまでの間ですか。何はともあれ設備を100%とは言わないまでも、99%ぐらいの確率で完備することがまず先決です。

それが先ほど申しました通り、設備が完成した段階で、今度いわゆるトレーニングをせざるを得ない。機械ができればすぐ動かせるというよりも、最近の機械は僕もよくわからないですけれど、ものすごく難しいです。ですから一番難しいのは何かというと、何らかの故障が発生したときに、その故障がどこで起こって、どこをどうすれば直るというのを発見するのが一番難しいらしくて、そのためには相当熟練の技術者がトレーニングを積まないと、そういう緊急時に対応するのが難しいことがあります。

したがって、まず機械が完備することが第一、続いてやっぱりそれを技術者がトレーニングして使いこなせるようになるという期間が必要で、そういう意味で言うと、機械だけで言えばもしかしたらそんなにからなくてもいいかもしないですけれど、トレーニング期間を考えると、やっぱりそのぐらいの時間を取っておいたほうがいいのではないかなどというのが、本当に3月になるかどうかわかりません。もうちょっと早くなるかもしれませんけれども、3月ぐらいまで時間かけてじっくりやったほうがいいというのが3月説です。

記者：第三者機関ということですけれども、どういう協力をしましたか。

萩原社長：調査委員会から、例えばこういうことを教えてくれとか、そういうことに関しては全面的に協力するということになっていますから、それもわれわれは細かくどういう調査を今なさっているか知りませんが、例えばこういう伝票を見せてほしいなどの要請には、当然それにはお答えしているはずです。例えば事情を聞きたいということで、一般社員、プロデューサー、ディレクター、そういう人たちから事情を聞きたいということがあれば、それは積極的にご協力するという姿勢も当然とっています。その連中が何聞かれたかというのはわかりません。多分口止めされているのだろうと思います。

（了）